

素顔のご入居者 第四十九回

妻の思い出を胸に手に入れた終の住処

たけなか
竹中 敬明様

趣味と仲間を持ち、セカンドステージをおおいに躍進中の竹中様をご紹介します。奥様との大切な思い出も伺いました。

【家事は妻に任せきり】

私は長年にわたり県庁の防災関連で責のある職に就いていました。その為、帰宅は毎晩22時23時。休日でも不時の災害に備えて24時間体制。家族を旅行に連れて行くこともできませんでした。妻は仕事に没頭する私に文句のひとつも言わずに家を守り、母として



中世戦国史の研究がライフワークの竹中様。
お孫さんから届いた可愛い絵に囲まれて研究成果を執筆中です。

2人の息子を愛情深く育て、嫁命に尽くす、私にはもったいないくらいの良くできた女性でした。私が充実した現役時代を全うすることができたのも妻のおかげです。

【52歳で逝った妻が残したこと】

ある日、妻が癌におかされていたことが分かりました。それから妻の治療の合間に彼女の望む場所へ夫婦2人でできる限りの旅行をしました。それは今まで苦勞ばかり掛けてきた妻へのせめてもの罪滅ぼしでもありました。

本人も自分に時間が残されていないと感じていたのでしょうか、「お父さん、ご飯はこうやって炊くのよ。お味噌汁の作り方はね……。」と私に教えようとするんです。体調が思わしくない時も何時間も台所に立ち食卓には7品も8品もの料理が並びました。また、

いつの間にか自宅の衣装ケースには私と2人の息子、それぞれの名前が貼られ、季節ごとの衣類がきちんと整理して入れられていました。妻は残る私達に懸命に思いを伝えようとしていたのです。

【妻との約束を果たす】

妻の亡き後、まだ学生だった息子達と男3人の暮らしが始まりました。私は家事一切に手を抜かず、父親として息子達には人として守るべきことをしっかり教えるように、厳しく接しました。お陰様で双方心身ともに健全に成長してくれました。独り立ちしてそれぞれ家庭を持った彼らの姿を、遠くから妻も喜んでくれたら嬉しいです。



亡き奥様への想いを一冊の本に綴られました。

【終の住処を得てライフワークに没頭する日々】

私は不便を感じることなく独り暮らしを続けていましたが、い

けることなく自己完結できる生活スタイルを求めて「ゆうゆうの里」に入居を決めました。

岐阜からこの地に来て、まずはここでどんな暮らしをしようかと考えた時に、自分の活動の場を求め地域社会に出ようと考えました。その為には誘われるのを待つのではなく自分から飛び込むことにしました。そして浜松で活動する「アクティブシニアセミナー」に仲間入りしました。そこで知り合った様々な方から多様な生活や考えや人生観に触れて自分の世界が大きく広がりました。また、現在は中世戦国史に関する研究と執筆をライフワークにしています。私は歴史の舞台で活躍する武将よりたとえ敗れても義を立て貫く悲運の武将に強く惹かれます。今後、執筆の上でそんな武将をモデルにしてみたいですね。日課である座禅の最中に天竜浜名湖鉄道のごトン、ゴトン、という列車の音を遠くに聞くと「浜松の人間になったなあ」と言う思いが湧きます。

これでよし 終の棲家か 浜の里